

西

多賀城

去京一千五百里

去蝦夷國界一百廿里

去常陸國界四百十二里

去下野國界二百七十四里

去韃靼國界二千里

重要文化財

多賀城碑

甲子 桜寮使 兼

軍從四位上勳四等大野朝臣東人

也 夫 平 寶 字 六 年 歲 次 壬 寅 參 議 東

節 度 使 從 四 位 上 仁 部 省 卿 兼 桜 寮

將 軍 藤 原 惠 美 朝 臣 朝 稻 德 造 也

天平寶字六年十二月一日

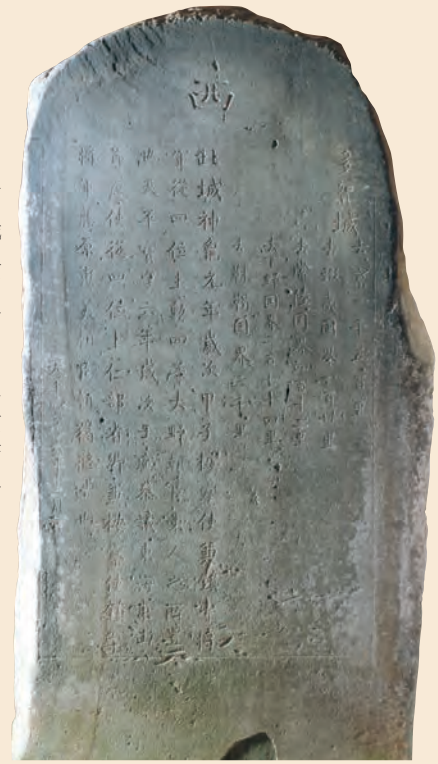
多賀城碑は、宮城県多賀城市市川字田屋場^{たやば}にあります。ここは奈良・平安時代、東北全域を治めるための役所である多賀城が置かれた場所で、碑は、多賀城の正門にあたる南門から城内に入ってすぐのところ^{うたまくら}に立っています。

江戸時代初めに発見され、すぐに歌枕「壺碑」の名^{つぼのいしづみ}で呼ばれました。このことが碑の存在を有名にし、松尾芭蕉、井原西鶴、新井白石、水戸光圀などが碑について書き残しています。

多賀城と古代東北の解明にとって重要な記載があり、また数少ない奈良時代の金石文として貴重であるということから、平成10年6月30日、国の重要文化財(古文書)に指定されました。



多賀城跡と多賀城碑



多賀城碑 (東北歴史博物館提供)

西 此の城は、神亀元年、歳は甲子に次る。按察使兼鎮守將軍使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獨、修造するなり。

使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獨、修造するなり。

天平宝字六年十二月一日

多賀城 京を去ること一千五百里
蝦夷国の界を去ること一百廿里
常陸国の界を去ること四百十二里
下野国の界を去ること二百七十四里
靺鞨国の界を去ること三千里

四位上 勳四等大野朝臣東人の置く所なり。天平宝字六年、歳は壬寅に次る。参議東海東山節度使從四位上 仁部省卿兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣朝獨、修造するなり。

碑の形状と碑文内容

碑は高さ248cm、最大幅103cmであり、花崗岩質砂岩という非常に硬い石材を用い、碑面のみ平らに加工されています。ほぼ真西を向き、下部を約50cm埋めた状態で垂直に立っています。

首部に「西」の一字があり、その下、縦122cm、横79cmの範囲を細い線で囲んだ中に11行にわたって140の文字が彫られています。

最初の5行は簡条書きで、京(平城京)、蝦夷国(宮城県北以北の地域)、常陸国(茨城県)、下野国(栃木県)、靺鞨国(中国東北部)から多賀城までの距離が記されています。当時の1里は約535mで、換算するとそれぞれ約800km、64km、220km、147kmとなります。靺鞨国界からの距離三千里は実数ではなく、遠いということを示す数字と考えられます。

次の5行が本文で、前段には神亀元年(724)、大野朝臣東人が多賀城を設置したことが、後段には、天平宝字6年(762)藤原惠美朝臣朝獨が多賀城を修造したことが記されています。

最後の行は碑の建立年月日を示しています。

東人及び朝獨の肩書きについては、以下のとおりです。
按察使—養老3年(719)に設置された、地方行政監察のための職。特定の国の国司が任命され、周辺数か国を管轄しました。陸奥国には養老4年9月以前に置かれていたことが明らかで、陸奥出羽両国の按察使には陸奥守があたりました。奈良時代後半以降、全国的に按察使制度が衰退した後も、陸奥出羽按察使は役職として残りますが、やがて参議以上の中央貴族が兼任するようになり、有名無実化していきます。

鎮守將軍—陸奥国に置かれた軍政機関の長官で、ほとんどが陸奥守との兼任でした。

参議—大臣及び大・中納言に次ぐもので、政府の重要事項を決定する要職。

節度使—奈良時代、軍事を司るために設置された臨時の職で、朝獨が任命されたのは、新羅との緊張関係に対応するためと考えられています。

仁部省—民政や税を取り扱う民部省のことで、卿はその長官。天平宝字2年(758)朝獨の父藤原仲麻呂(惠美押勝)が主な官名を中国風に改めた際に改称されました。しかしこの措置も天平宝字8年(764)、仲麻呂の失脚に伴い、元に戻されます。

碑の発見

多賀城碑は、江戸時代の初め頃に発見されたと言われています。新井白石（1657～1725）の『同文通考』には、「万治・寛文の頃、土中からみつかったという」と記され、一方、仙台藩の儒学者佐久間洞巖（1653～1736）の『奥羽観蹟聞老志』によれば「草莽の中にうずもれること千年」とあります。「発見」が土中から掘り出されたことを指すのか、それとも草むらの中にあって人目につかなかったものを確認したことを指すのか、明らかではありません。



8世紀の東アジア

碑をめぐる人々

碑は発見されるとすぐ、歌枕「壺碑」の名前で呼ばれたため、井原西鶴、松尾芭蕉など多くの文人たちの関心を集めました。さらに碑についての研究も盛んで、水戸光圀は「大日本史」編纂のために家臣を多賀城に派遣し、碑の調査をさせています。

光圀はまた、この頃発見された下野国（現在の栃木県）の那須国造碑の研究・保存につとめ、覆堂を建てて保護を行いました。多賀城に派遣した家臣の報告により、苔むした碑の様子を知った光圀は、自らの経験をふまえて仙台藩4代藩主伊達綱村に対し、碑を修復し覆堂を建て、後の世まで伝えるようにと、手紙を書き送っています。その後間もなく多賀城碑に覆堂が建てられました。



壺碑（『芭蕉翁絵詞伝』狩野正榮至信 大津市義仲寺提供）

寛政4年（1792）芭蕉の百回忌に義仲寺芭蕉堂に供奉られた3巻の絵巻。苔むした碑を見る芭蕉と曾良が描かれている。



坪碑史考證 藤塚知明

天明3年（1783）刊行。覆堂を描いたものとしては最も古い。



水戸光圀肖像画（茨城県立歴史館提供）

江戸時代後期の南画家、立原杏所筆によるもの。



歌枕 —つぼのいしぶみ—

多賀城碑が発見と同時に有名になったのは、「つぼのいしぶみ」の名で呼ばれたためです。

「つぼのいしぶみ」は、平安時代の終わり頃から歌に詠み込まれた歌枕です。

「日数経て かく降りつもる 雪なれば
つぼの碑 跡やたゆらん」
懐円 (『歌枕名寄』)

「陸奥の おくゆかしくそ 思ほゆる
つぼのいしぶみ その浜風」
西行 (『山家集』)

「みちのくの いはで忍ぶは えぞ知らぬ
かき尽してよ 壺のいしぶみ」
頼朝 (『新古今和歌集』)

「つぼのいしぶみ」は、はるかなみちのくにある碑として意識されているようですが、碑の姿かたちなどが歌の主題になることはほとんどなく、歌の中では文(ふみ、または手紙・恋文)の意味で用いられるだけです。歌の内容からは碑のある場所も、さらには碑が実際にあったのか、あるいは歌の世界の中で作り上げられた幻の碑なのか、明らかではありません。

このように所在も実体も不明な「つぼのいしぶみ」と、多賀城碑との結びつきには、仙台藩が強く関わっていたようです。

江戸時代、各藩で「歌枕の整備」が行われました。これは古来の歌枕を藩内に設定しようというものです。現在多賀城市内に歌枕ゆかりの地とされている名所旧跡が集中しているのは、仙台藩による名所整備の結果であると考えられます。その方法としては、おそらく平安時代初めから有名であった「末の松山」などを核にして、その周辺に歌枕を集めていくというやり方がとられ、壺碑もこの時に設定されたのでしょう。

南部藩でも同様のことが行われ、「末の松山」「つぼのいしぶみ」などが藩内に名所として整備されました。



仙台藩の歌枕分布



末の松山



碑の偽作説

江戸時代初め頃に発見され、壺碑の名で呼ばれた碑に対し、偽作ではないかという疑いもたれるようになってきます。

18世紀半ば、水戸藩の学者長久保赤水が「壺碑は南部藩にあり、宮城郡市川村にある碑は多賀城修造碑である」と述べたことが、碑に対する評価を大きく変えるきっかけになりました。

そして明治に入り、国学者田中義成、書家中村不折などによる、本格的な真偽論争が始まります。

碑が偽作であるとする主な根拠として①文字の彫り方 ②書風・書体 ③碑文の内容(里程・国号、官位・官職) ④その他(碑の形態、関係文献批判など)が挙げられました。これに対する反論もありましたが決着がつかず、碑は偽作とされたまま、やがて碑に対する人々の関心も薄れ、碑そのものも忘れられたかのような存在となっていきます。そして資料として役立てることができないまま、多賀城跡の発掘調査が始まりました。



陸奥名所図十四景 (東北歴史博物館提供)

寛政4年(1792)刊行。南部藩の「壺村」にある「日本中央」の碑が「壺ノ石碑」として描かれている。



多賀城跡の発掘調査

多賀城跡の発掘調査は昭和36年、多賀城
廃寺跡から始まり、38年には政庁跡の調査が
行われました。

発掘調査が進むにつれて、奈良・平安時代
を通じて多賀城には4時期の変遷があることが
わかってきました。第Ⅰ期－多賀城創建－8世
紀前半、第Ⅱ期－大々的な改修－8世紀半ばか
ら宝亀11年(780)伊治公皆麻呂の乱による火
災まで、第Ⅲ期－皆麻呂の乱後の復興から貞観
11年(869)の大地震による崩壊まで、第Ⅳ期－
地震後の復興の4期です。このうち第Ⅰ・Ⅲ・
Ⅳ期については、調査着手以前から文献上の記
載が、ある程度調査で裏付けられるのではない
かとの期待がもたれ、事実、その痕跡が確認で
きました。しかし第Ⅱ期、つまり8世紀半ばの大々的な改修については、全く予想外のことでした。

これにより、調査開始後もほとんど顧みられることのなかった多賀城碑が、再び注目されることとなります。碑には
天平宝字6年(762)藤原恵美朝臣朝獯が多賀城を修造したことが記されています。つまり、発掘調査で初めて解明された第
Ⅱ期の存在が、碑に刻まれていたわけです。仮に碑が偽作であれば、このような記載は不可能といわなければなりません。
こうして、多賀城跡の調査研究成果をうけ、偽物とされてきた碑の再検討が開始されました。



多賀城政庁第Ⅱ期復元模型 (東北歴史博物館提供)



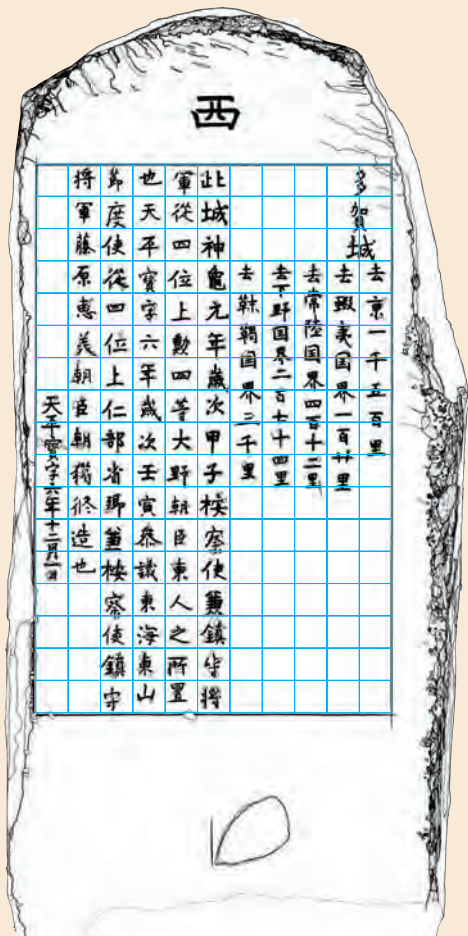
碑の再検討とその結果

再検討は、まず、碑を偽物としてきた根拠が確かなものであるかどうか、調
査することから始まりました。その結果以下のように結論づけられました。

- ①文字の彫り方－古代の碑文の彫り方である薬研彫りであることを確認。
- ②書風・書体－中村不折が主張したような、さまざまな拓本からの文字を
集めた「集字」ではなく、多くの文字をモデルとしながらも1人の人物に
よって書かれたものであることが判明。
- ③碑文の内容
 - a 里程－多賀城までの各国からの距離を割り出すための資料がないため、
今後の課題として保留。
 - b 国号－「蝦夷国」というのは確かに存在しないが、そのように表現する
ことで多賀城が支配する範囲を明らかにすることに意味があった。ま
た「靺鞨国」については、「渤海国」の旧名であるとされていたが、両者
が同一国の新旧の呼び名である証拠は得られなかった。
 - c 官位・官職－東人の「従四位上」については、神亀元年段階のものではな
く、陸奥国在任中のものと理解すれば問題はない。朝獯は、確かに従四
位上にはなっていないが、東人との均衡をとるためにあえて記したと思
われる。

さらに、安倍辰夫氏により、碑文を割り付けた際のものさしは、奈良時代に
使われた天平尺である可能性が指摘されています。

多方面からの検討の結果、碑は8世紀の中央政府による東北支配の実態解
明に欠くことのできない資料であることが再確認されました。



多賀城碑文割付図 (安倍辰夫氏作成)



日本古代の碑

中国の影響により、日本列島内に碑が建てられるようになるのは、7世紀後半頃と考えられています。古代の碑で現在確認されるものは19基で、かつてあったものを含めても26基のみです。これは同時代の中国・朝鮮半島と比べると非常に少なく、さらに碑の形もほとんどが自然石を少し加工した程度のもので、石碑の文化は、古代日本においてあまり浸透しなかったようです。

日本の古碑一覧

番号	碑名	所在地(旧国名)	年代	形状/材質	内容
1	宇治橋断碑	京都府宇治市(山城)	646年	蓋首/石英斑岩	宇治橋架橋の由来を刻したもの
2	山上碑	群馬県高崎市(上野)	681年	自然石/輝石安山岩	黒壳刀自の墓碑。上野三碑の一つ
3	那須国造碑	栃木県大田原市(下野)	700年	蓋首/花崗閃緑岩	那須国造を務めた那須直草提の墓碑
4	多胡碑	群馬県高崎市(上野)	711年	蓋首/花崗岩質砂岩	多胡郡の建郡碑。上野三碑の一つ
5	超明寺碑	滋賀県大津市(近江)	717年	圭頭/水成岩	石柱建立を記したもの
6	元明天皇陵碑	奈良県奈良市(大和)	721年	方首/花崗岩?	元明天皇の墓碑
7	阿波国造碑	徳島県石井町(阿波)	723年	蓋首/埴	阿波国造の墓碑
8	金井沢碑	群馬県高崎市(上野)	726年	自然石/輝石安山岩	先祖の供養碑。上野三碑の一つ
9	竹野王多重塔	奈良県明日香村(大和)	751年	五重塔/凝灰岩	竹野王の塔造立を記したもの
10	仏足石碑	奈良県奈良市(大和)	753年	角礫岩	釈迦の象徴である仏足石に、供養のための銘を刻したもの
11	足石跡歌碑	奈良県奈良市(大和)	753年	縦板状/粘板岩	釈迦の足跡を礼拝する功德などを詠んだ和歌を刻した歌碑
12	多賀城碑	宮城県多賀城市(陸奥)	762年	円首/硬質砂岩	修造記念碑
13	宇智川磨崖碑	奈良県五條市(大和)	778年	露頭/雲母片岩	大般涅槃経を刻したもの
14	浄水寺南大門碑	熊本県宇城市(肥後)	790年	方首/凝灰岩	寺の由緒、四至、財産や、造寺に貢献した僧を顕彰した碑
15	浄水寺灯笼竿石	熊本県宇城市(肥後)	801年	灯笼・鼓状/凝灰岩	灯笼の寄進碑
16	山上多重塔	群馬県桐生市(上野)	801年	三重塔/安山岩	僧道輪による供養塔
17	浄水寺寺領碑	熊本県宇城市(肥後)	826年	蓋首/凝灰岩	寺領碑
18	浄水寺如法経碑	熊本県宇城市(肥後)	1064年	蓋首/凝灰岩	妙法蓮華経の写経を埋納し、弥勒菩薩の出現に備えたことを刻したもの
19	天養元年如法経所碑	山形県山形市(出羽)	1144年	圭首/安山岩	妙法蓮華経の写経を埋納し、弥勒菩薩の出現に備えたことを刻したもの
20	伊予道後温湯碑	愛媛県松山市(伊予)	596年		伊予道後温泉の効能を称えた碑
21	藤原鎌足碑	大阪府太子町(河内)	669年		墓碑
22	采女氏塋域碑	大阪府太子町(河内)	689年		采女竹良の墓碑
23	南天竺婆羅門僧正碑	奈良県奈良市(大和)	770年		造像碑
24	大安寺碑	奈良県奈良市(大和)	775年		造寺碑
25	沙門勝道歴山水塋玄碑	栃木県日光市(下野)	814年		顕彰碑
26	益田池碑	奈良県橿原市(大和)	825年		池の完成を記念して空海が記したとされる碑

1～19 現存する碑 20～26 現存しない碑

碑の形状の種類



円首 (中国 孔宙碑)

頭部が丸く加工されているもの。日本では多賀城碑が唯一の例。



蓋首

阿波国造碑(復元複製)※
頭部に笠石をのせたもの



方首

浄水寺南大門碑(複製)※
頭部を方形に加工したもの



圭首

如法経所碑
頭部を三角に加工したもの





日本三古碑

多賀城碑、那須国造碑、多胡碑は日本三古碑と呼ばれます。

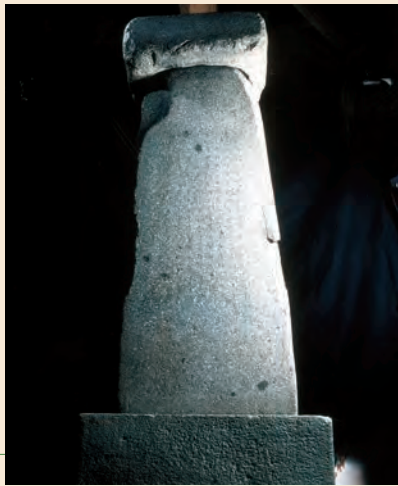
那須国造碑(国宝)



那須国造碑覆堂 (那珂川町なす風土記の丘資料館提供)

永昌元年己丑年四月、飛鳥浄御原の大宮の那須国造、追大老那須直草提、評督を賜る。歳は庚子に次年、正月二壬子の日、辰節に殄ゆ。故、意斯麻呂等、碑銘を立てしふと云う。仰ぎ惟いみるに、殞公は広氏の尊胤にして、国家の棟梁なり。一世の中に重ねて式照を被り、一命の期に運ねて再甦せらる。骨を砕き髓を挑ぐとも、豈前恩に報いむや。是を以て曾子の家に驕子有ること無く、仲尼の門に罵る者有ること無し。孝を行うの子は其の語を改めず。夏の堯の心を銘じて、神を澄まし乾を照らさむ。六月の童子は、意香しくして坤を助けむ。徒を作すこと之れ大にして、言を合わせ字に喩らかにす。故、翼無くして長く飛び、根無くして更に固からむ。

(読み下し文は東野治之著『日本古代金石文の研究』を参考)



那須国造碑

(那珂川町なす風土記の丘資料館提供)

栃木県大田原市湯津上にあり、現在笠石神社の御神体としてまつられています。

石材は花崗閃緑岩という非常に堅い石です。高さ120cm、最大幅48.5cm。

持統天皇3年(689)4月に、評督(郡の長官)に任命された那須国造追大老那須直草提が、文武天皇4年(700)正月2日に死去したので、後継者である息子の意斯麻呂らが碑を建て、故人をしのびその業績を称え、さらに草提の地位を子が受け継いだことを述べています。

多胡碑(特別史跡)

弁官符す。上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡并せて三郡の内、三百戸を郡と成し、羊に給いて多胡郡と成せ。和銅四年三月九日甲寅に宣る。左中弁・正五位下多治比真人。太政官・二品穗積親王、左大臣・正二位石上尊、右大臣・正二位藤原尊。

(読み下し文は高崎市「上野三碑」パンフレット(2018年)を参考)

群馬県高崎市吉井町池にあり、吉井町の南方で産出する花崗岩質砂岩を用いています。碑身の高さ129cm、最大幅69cm。



多胡碑覆屋 (多胡碑記念館提供)



多胡碑 (多胡碑記念館提供)

上野国片岡郡・緑野郡・甘良郡の三郡のうちの300戸で一つの郡をつくり、羊という人物を長官に任命し、新しく多胡郡を置くという命令が、和銅4年(711)3月9日に伝えられたことが記されています。平成29年10月31日に、上野三碑として山上碑・金井沢碑(高崎市山名町)とともに、ユネスコ「世界の記憶」に登録されました。



覆堂に守られて立つ 多賀城碑

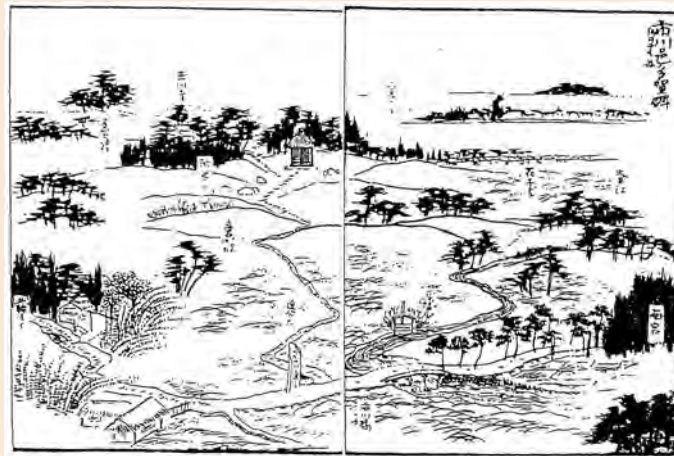
平成26年10月6日、「末の松山」「興井」とともに、「壺碑(つぼの石ぶみ)」として名勝「おくのほそ道の風景地」に指定されました。



「つぼのいしぶみ」道標



芭蕉翁礼讃碑



「市川邑多賀碑」

〔奥州名所図会〕大場雄渕 出典：朝倉治彦編1987『日本名所風俗図会1陸奥・北陸の巻』角川書店 原資料所蔵：仙台市博物館

19世紀初頭頃の成立。中央下に「つぼのいしぶみ」道標がみえる。

碑の周辺

多賀城碑の周辺は、多賀城跡の中でもひととき風情のある場所で、春には桜、秋には紅葉に美しく彩られます。

ここには多賀城碑にちなんだいくつかの石碑があります。

一つは「つぼのいしぶみ」と刻んだ道標です。これは奈良市にある墨専門店古梅園の主、松井元泰が享保14年(1729)に建てたもので、道標が立つ場所から多賀城碑までの距離が記されています。これは当初、市川橋のたもとに置かれていました。

二つ目は「芭蕉翁礼讃碑」で昭和2年(1927)鈴木源一郎ほか7名により建立されたものです。元禄2年(1689)、おくの細道の旅に出た松尾芭蕉は、当時壺碑と呼ばれていた多賀城碑を訪ね、その時の感動を紀行文「おくのほそ道」に書き残しました。しかし、この地で句を残さなかったため、多賀城に来る直前、仙台市の木ノ下薬師堂で詠んだ句「あやめ草足に結ばん草鞋の緒」と、「おくのほそ道」中にある「壺碑」の一節を碑に刻み、芭蕉が訪れた記念としたのでしょう。

重要文化財 多賀城碑

■編集・発行

多賀城市教育委員会 (多賀城市埋蔵文化財調査センター)

〒985-8531 宮城県多賀城市中央二丁目 27-1

Tel 022 (368) 0134 Fax 022 (352) 6548

この印刷物は再生紙を使用しています

